

新
刊
紹
介

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth Not
to be though expert in both.

『イギリス文学』

児玉 実用著

(ミネルヴァ書房・A5判・二四九頁・
七五〇円)

児玉教授は、教授である前にまず詩人である、と言ふべき方であつて、このぎくしゃくしたアカデミズムの横行する中に、まことに貴重な存在であることは、誰しもが感ずる所であろう。その児玉教授がこの度「イギリス文学」という著書を出版された。だが、最近同教授が相いついで世に問われた「チャイル

ド・ハロルドの巡礼」とも言える外遊三部作の詩集と、この「イギリス文学」とを別個のものとして読むことはできないと思う。

ある人はその両者の隔たりの大きさ、あるいは、この書物の異常なまでに乾燥した世界と、あの詩集の豊かな、うるおいの世界とが同一著者の投影であることに、とまどうかも知れない。だが、脈絡のない隔たりは、無意味な分裂であるとしても、相互に響き合う隔たりは意味深い深淵であると言える。私はその隔たりの中に同教授の世界を感じるものである。その詩集が単なる旅日記でないのは、この「イギリス文学」が単なる歴史的通観でないのと同じだと言つてよからう。何故ならその両者は補い合い、証明し合っているからである。

このような位置づけをした上で、本書の内容に関し、若干の紹介を試みよう。まず、本書は、「はしがき」にも述べられているように、「イギリス文学を通観的に述べたもので……おのずから歴史的に」まとめられたイギリス文学概観の書物である。二百数十頁という、手頃な分量の中に、アリストテレスの詩学を中心とした著者の文学観を主軸とし

英文学の民族的背景の上に、古代英文学からディラン・トマスに至る千五百年にわたるイギリス文学の展開の歴史が圧縮されている。

しかし、それだけではなく、例えば、近代文明の到来とともに失われることとなった「素朴性と人間性」を基調とする中世のバラッドに強い共感を示す姿勢には、単に文学者としてだけではなく、人間の心を歌う詩人としての著者の信念が強くうかがわれるのである。それだけにこの小柄な書物を読むには莫大なエネルギーを必要とする。それは、二十章から成るこの書物が、それぞれの章だけで優に一冊の書物に匹敵し得るエネルギーを蔵しているからだ、と言えよう。

言い換えれば、本書は、読むだけで、イギリス文学がわかるようなものではなく、読むことによって、更に研究を進めざるを得なくなるような書物であり、受動的読者を寄せつけない、厳しさを持った書物だと言えよう。

ひたむきな向学心を持ち、著者の詩集の香気に触れた者にとって、本書は初めてその真価を発揮するであろう。そして、ここに本書の持つ大きな特色の一つがあると考えるのである。

(大学文学部教授・兼師川 虹)

『子どもの仕事』

フィリップ・ミュラー著

深田尚彦訳

(平凡社・A5判・二八〇頁・五五〇円)

本書は平凡社の企画による「世界大学選書」中の一冊として刊行されたものであり、訳者は同志社女子大学の深田尚彦教授（心理学）である。原著はフランス語であり、著者はヌーシャテル大学心理学研究所長フィリップ・ミュラー博士である。原著書のタイトルは「児童期の課題」"The Tasks of Childhood"（英語版）である。こゝに課題 Tasks とは P・ブロス、D・プレスコット、S・M・コレイ、R・J・ハヴィガーストラが発達研究で用いた「発達課題」Developmental tasks と同義であろう。訳者は「生まれてくる子どもが独立して社会の一員となるまでに成就すべき仕事は多い」と述べるが、まさしくここでの発達課題とは、児童期に与えられ、児童

期において解決し成し遂げることを要請される「仕事」なのである。

さて本書の構成であるが、これまでわが国に翻訳紹介された児童心理学書——例えば A・ゲゼル、P・H・マッセン、E・B・ハーロック、A・T・ジャーンシルド、C・ビューラー、F・L・グッドイナフなどとはかなり異なったユニークな内容をもっていることに気付く。しかしこのことは単に構成だけではない。それは著者の児童観が本書の構成と問題の取り扱い方にかなり明瞭に窺われることである。

このことは、入門書としての本書の性格を考えるとき長所でもあると同時に多少の欠点にもなっていないであろうか。しかしそれはもちろん大きな問題ではない。

さて、本書はそれぞれが章に当る一〇の部分から成っている。すなわち、I「児童期の意義の変遷」II「知能の測定」III「知能の定義」IV「基本的ドライヴ」V「状況と関係」VI「正常とは何か」VII「児童期の主要区分」VIII「幼児時代とその仕事」IX「学童時代とその発達の仕事」X「青年時代」などである。それぞれの標題からしてもわかるように I から

ら VI までの部分は児童の行動の理解に関する基礎的な問題であり、VII 以下の部分が主として発達課題そのものに視点を当てたもので、本書のタイトルからすればむしろ後者が主要な部分を占めるべきであるという感じがしないでもないが、本書が単なる発達心理学の入門書ではなく、広い意味で人間行動の理解という点から発達の問題に接近しようという意図したものであるとすれば、極めてゆき届いた構成であり親切な叙述であるといえよう。

以上読後感的な紹介になったのであるが、もちろん各パートに関しては明快な叙述がされて、訳者のきわめて適切な翻訳と相まって発達心理学のみならず人間理解の書物として格好の研究書といえよう。

なお最後の部分に訳者自身の筆になる「最近の児童心理学」という一文が解説として付されているが、児童心理学のエキスパートであり、児童心理学に該博な学識と展望をもたれている訳者が、もう数倍のページをこれに割かれたならばと、むしろそれが惜しまれてならない。

（大学文学部教授・野辺地 正之）